

連載 最終回

今後、日本の子どもたちにどのような能力が求められているのでしょうか。一つのヒントはオランダの教育の方法にあります。オランダは1960年代頃までは、日本に劣らないぐらいかたくなな集団一斉型教育で、子どもたちは先生の教えることを一方的に受身で学んでいました。当時は、多数の移民労働者の受け入れに伴う、オランダ病といわれる経済的沈下と政治闘争の季節で国は苦しみました。労働可能な若者人口の20%が社会保障費で生活し始めただけでなく、労働意欲もなくなっていたのです。

オランダ病の克服

- ・ オランダを襲った1980年代の不況と社会不安
 - ・ オランダ貨幣ギルダー高
 - ・ 国家の経済の50%を輸出に依存していた
 - ・ 移民労働者の増加により若者が職を失う

- ・ オランダ病と呼ばれる国民の意欲の喪失
 - ・ 高い賃金と短い労働時間
 - ・ 若者が意欲を失い、労働人口の20%が失業保険、生活保護で生活をする



そのような状況の中で、現場の教師たちによる現場からの教育改革が政府も動かしました。「先生と呼ばないで名前を呼ぶ」「小さなグループに分けられたテーブルを囲んで座る」「異なる年齢の子どもたちを同じテーブルで学ばせる」と同時に、「勉強している教科も違う。算数の勉強をしている子の前では社会の地図を広げている、お隣の子は国語をしている」のです。黒板の前に立ち「先生は話す人、あなた方は黙って聞く人」というスタンスから、先生は「絶えず教室の中を歩き一人ひとりの子どもを指導する人」に変わったのです。もちろん、自分でやれる子どもの前では、余計な手助けをしないで「よくやっている」という眼差しを送るだけです。自分で興味あるものを見つけ、自分で答えを模索する能力を鍛えているのです。



教育的な効果は目に見えるのではありませんが、このような教育的な土壌で育ってきたオランダ人のキャラクターといえば、非常に開放的でリラックスしています。私が所属しているC i t o（旧王立教育機構）の会議でも、例え相手が博士号や大学教授職であっても、数分もすると互いにファーストネームで呼び合うようになるし、余程正規の型苦しい会議でない限り、自由にコーヒーを飲みながら進行します。C i t oの職員は高度な教育を身につけた人たちですが、彼らの職業歴は転々としています。C i t o開発の教育法ピラミッドメソッドを国際的に発展させる部門のトップは、イギリスで株取引の売買人だったし、現在の担当者も長年おもちゃビジネスのセールスマンでした。4回職歴を変わってきた友人に「日本では一つの仕事や会社で定年まで働くのが一般的だが、君はなぜ、職業を転々とするのか」とたずねたときに、まじめな顔つきで筆者に向かって、「一回限りの人生を、なぜ、同じ職業で終えるのか」と質問されました。ジョーク的なやり取りですが、彼らは幼児期からオートノミー（自律）と呼ばれる、自己選択と自己解決力を鍛えられて育ちます。

このような子どもたちの心は安定し、問題にぶつかっても、自力で乗り越えていく力をつけていきます。水に関する国際ビジネスの例で見たような、今の日本人に欠けるプレゼンテーション能力や臨機応変な対応力も育てていきます。

オランダ人が外国からほめて欲しいー

God created Heaven and Earth, but the Dutch
created the Netherland.

神様は天国と地球を創造されたが、オランダ人はオランダ(低地の国)を創造した。